始終も立派な大欲業仕。金禊の大詰ふ至らぬ迎の
嘉元の一心。生洲よ樋の吹水仕ひよ鮮魚と搖こ差上升
用で。徒長料理の初日より。偽くよれ入を頼ふものと

竹柴其水記

蛇の目鮨開店告條

劇場の作者が口上めかして。毛しかの初日を四拍子高中八。新宮
堅附で四河際の。蛇の目ぜしと同店あて。特義其の男師立。
又人の小店の小劇場て。遠りを面の大劇場。對しほそも
かこがるましけれど。馬の足ふ。堅氣と。四ふ。海の東世日響行。
鳥花の三番叟より。なぬぬ。鯉の庖丁ゆて。四余光と云
光りふ磨上四誂ふ。も早芸布ふ。出前も蕎麦刻返し。四搭
四ふ。蛇の目の今ふ由緒四。助太ふ。助を入ふ。主人が高の
蕎ふ。精て勉強致し。結水び。義女ふ限ふ。四泥父を偽ふ
頼ひ上弁ゆ。其て太鼓を叩くりめて

明治廿年　竹柴其水記

来ル六月十七日開業
当日差景星上仕ル

芸場丁
業師地内入口角
蛇の目壽司

一年去蛇の目

壽

蛇の目鮨開業告條

新富街小陣を取長年蛇の目の名を掲し四得意様の援兵
ゆて。猪岡得ふる幸先能さふ。最一ツどこで。鶴上ふさんと寄此るて